



食育と紙 服部幸應

紙と食べ物は、兄弟のようなものです。地球には森林があります。その森の木から葉が落ち、腐葉土となり、微生物の住み処や餌になり、その栄養が川から海に流れ出て、プランクトンを育て、魚介類を育て……。つまり、すべての食物の元が森林というわけです。紙も、森の木から作られ、リサイクルされ、使命を終えれば土に戻ります。そうした自然の循環の中にあるから、私は食べ物と同様に、紙に愛着を感じるのだと思います。

私はこの十六年来、「食育」の大切さを訴えてきました。子供のうちに食生活についてしっかり教えることが、知育、徳育、体育と同じく、いやむしろ、生きる基本として最も大切なのです。これを政府に八年前から提案してきた結果、念願がなつて、一昨年七月に「食育基本法」

が施行されました。この考え方を伝えるために、毎日、全国を奔走しています。

食育の三本柱は、「選食能力を身につける」、「食を通じた躰」、「地球規模で食料問題を考える」だと私は思ってきました。安全で安心して健康な食べ物を見分ける能力を養うこと。箸を正しく持ち、いただきます、ごちそうさまがきちんとできるという食生活の基本、ひいては人間としての素養は、食卓で完成するということ。そして、食料自給率や地球環境のことを考え、残飯世界一という日本の現状を反省し、もったいないという気持ちを知ること。

これらはみな、幼いうちに学ばなければならぬのに、親たち、大人たちの多くが無知・無関心でいいはずがありません。簡単で便利だからとファーストフードやコンビニ弁当など人工的な食事はばかり与えられ、美味しいと思われ、食べ残しや売れ残りを捨てることを何とも思わない、そんなふう育てられた子供は不幸でしょう。

携帯電話は便利だし、テレビは面白いかも知れないけれど、そればかりに頼んで、紙の手ざわりを知らない子供がいたら、とても不幸でしょう。それと同じです。

服部幸應(はっとり・ゆきお) ●1945年、東京生まれ。立教大学卒業。'77年より服部栄養専門学校校長。昭和大学医学部博士課程修了、医学博士。内閣府「食育推進会議」委員をはじめ、厚生労働省、農林水産省、文部科学省の多くの機関で委員などを務める。藍綬褒章、厚生大臣表彰、文部大臣表彰、フランス政府より国家功労勲章、農事功労勲章を受章。「食育のすすめ」「大人の食育」など著書多数。



食育のことを知ってもらうために、私たちは電波も使います。しかしテレビ画面というのは右から左に流れていき、残るのは印象に過ぎません。やはり、きちんとデータを示して筋道を理解してもらうには、紙媒体に勝るものはないと思います。さまざまな情報を盛り込め、畳んで持ち運べる、紙は二次元のもですが、発想は三次元にも四次元にもなる可能性を持つています。紙は文化の基本であり、基本のものは決してなくなりません。

たとえば和紙を漉く仕事を見ると、これは料理に通じるな、と感じたりしますが、実際、紙と料理には意外と接点が多い。食卓では、料理を載せるために紙がよく使われますが、これは、紙が一番安全な物質だからです。

紙を守るために植林して森を育てるといふ努力は、同時に、食を守ることにも通じます。紙に親しめば「もったいない」「自然を守ろう」という感覚も湧いてきます。食育と紙文化は、手をたずさえていくべきものです。

PAPER Q & A Vol.16

Q. なぜ、古紙を分別回収するのですか?

A. 古紙の種類によって再生される紙が違うからです。

古紙は新しい紙につくり直すことのできる大切な資源ですが、その種類ごとにそれぞれ違う用途の紙に再生されます。従って分別する必要があるのです。

せっかく集めても、異なる種類が混ざっていると、良質な紙として再生することができません。また、金属やプラスチック、粘着物のついた封筒、感熱紙など、紙に再生する際に障害になるものを取り除くことも大切です。このように古紙の価値を高めることが、大切な資源を有効利用する第一歩なのです。



資料：(財)古紙再生促進センター

◆今回は9月6日号、周防正行さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake